

音楽の創造行為における試行錯誤の理論化の試み（3） —哲学的論考による音楽行為における「幸福」の措定的定義の試み—

Re-considering the concept of trial and error for creative music-making: A philosophical discussion of “happiness” in music activity

清水 稔*

Minoru SHIMIZU*

要 旨

Aristotle said, “All things are done in the pursuit of happiness” in Nicomachean Ethics. Accordingly, human beings derive purpose in life from the pursuit of happiness. When an act is chosen in the pursuit of happiness, music education is required to understand the definition of happiness. However, it is not easy to define happiness, because an individual's choices and thinking are ambiguous and unique based on his/her past. Thus, happiness cannot be regarded as a generalized phenomenon. This paper adopts a phenomenological viewpoint of the relationship between recognition and existence on the time axis. The purpose of this paper is to clarify the nature of happiness in music activity.

キーワード：音楽教育，試行錯誤，哲学，幸福

はじめに

もし人間に存在することの意味が無いとすれば、音楽行為も教育も、その意味は消え失せてしまう。サルトルは、小説『嘔吐』の中で、そのような実存への不安を主人公ロカンタンに次のように代弁させる（1951, p.220）。

私は、この無意味な嵩ばった存在に対する怒りで、息が詰まりそうになった。すべてこれらのものがどこからやってきたのか、また、いかにして無の代りに世界が実存することになったのか、それを不審に思うことさえできなかった。それには意味がなかった、世界は到るところ、前にも後にも存在していた。世界〈以前〉にはなにもなかった。なにひとつなかった。それが実存しないことがあり得た瞬間はなかった。私をいらだたせたのはたしかにそのことである。

このときロカンタンを襲ったのは、実存としての意

味が消えることへの怖れ、〈私〉を形づくっていた世界が意味を与えてくれる存在ではなかったことへの怒りである。人間が存在する意味を失うならば、全ての行為が内包している「生きる意味」（raison d'être）は、どこに在るのだろうか。

意味は、或る時、突如として襲い掛かってくるときが在る。強迫観念的に過去が主体に現れるとき、意味は〈私〉の鏡像で在る故に、絶えず〈私〉として付き纏う。それが〈私〉にとって否定的過去で在るとき、主体は絶えず自己の否定に向き合うことになるだろう。ロカンタンは、そのような吐き気に襲われながらも、幸福を感じる瞬間を、蓄音機のレコードから流れる古いラグ・ライムの音楽に見出している（1951, p.37）。

私は気力が回復し、幸福を感じはじめる。これも別に少しも異常なことではない。〈吐き気〉の中のささやかな幸福なのだ。

ロカンタンがこのとき得ていた「幸福」、音楽がも

* 弘前大学教育学部音楽教育講座
Department of Music Education, Faculty of Education, Hirosaki University

たらしめた彼にとっての「幸福」は何であったのだろうか。ロカントンは、音楽と対峙している間の幸福を、〈われわれの〉時間の底に展開する時間と、〈われわれの時間〉とは別の時間の2つにおいて幸福が在ると言う(1951, p.37)。

この幸福は粘々した水溜りの底に〈われわれの〉時間——薄紫いろのズボン吊りと凹んだ腰掛けの時間——の底に展開する。それは、幅のある柔らかな瞬間からできていて、油の染みのように周辺から拡大して行く。幸福は生まれたばかりで、すでに年老いている。二十年も前から私はそれを識っていたように思われる。

ほかの幸福もある。私の外部に、あの鋼鉄の帯のようなもの、音楽の緊密な時間がある。それは、われわれの時間を貫いて横切り、われわれの時間を拒否し、酷薄な細い尖端でそれをひき裂く。われわれの時間とは別の時間がある。(傍点筆者)

音楽行為について論じるとき、〈われわれ〉は、この「音楽の幸福」のことについて語ることで必要が在るし、また、そうでなければならない。

先の「試行錯誤の理論化(2)」では、時間軸上における主体の知覚と運動の関係性から生じる〈何か〉について定義することを試みた。そこで導き出された命題は、「…でありたい」という欲求と実際の〈出会い〉との間に生じる満たされない〈何か〉が、創造行為の契機となっているということである。その〈何か〉を求めて常に創り続けること自体が主体の存在と運動を保証していることから、創る行為は人間の本質的な行為であることも示された。そのとき、個々の主体に生じる〈何か〉が「幸福」を求める故に生じているとすれば、その「幸福」の性質についても何らかの命題を措定しておく必要が在るだろう。人間の事象は、複雑な文脈の中で生じている。それゆえ帰納的に真正の命題を導き出すことは難しい。人間の事象は、実践の繰り返しにおいて命題の妥当性が証明されてゆくしかない。そのとき、未来は確定ではなく不確定であるため、人間は絶えず選択を迫られている。だが、向かうべき先を見据えていないと〈より善い選択〉にはつながらない。形而上的問題においても、人間は〈より善い選択〉のために、仮定的だが論理的に導かれた命題を反省的に措定する必要が在る。

本論では、「幸福」をアポリアとして棚上げにするのではなく、先の論文における定義を基に〈幸福〉と

名付けられる事態の性質を、時間と空間の枠組みから明らかにすることが目的である。

1. 「幸福」の合目的性と「生きがい」における時間軸の二重性

人間は、絶えず過ぎ去る時間の中で、意味を問うことで〈私〉の存在を持続させている。その意味作用が主体に向いたとき、主体は「生きる意味」を主体自身に問うことになる。しかし、進化の歴史において人が誕生する前から物質的世界が存在したことを考えれば、仮に人がいなくなってもどのような形で世界は在り続けることが予想されてしまう。そうすると世界を構成している事物が人に対して欲していることはないことになる。仮に世界が認識している対象でしかないのだとしても、私が消えれば世界も消えるとすれば、私そのものが持っている存在の意味は失われるだろう。そうすると、結局のところ、意味は〈私〉がつくり出しているのに過ぎない、ということになる。そのような〈世界は意味を与えていない〉という現実が立ち現れる意味作用の事態を回避するように、人は〈生きること〉に意味をつくり出すことで、その問いを覆い隠していると言える。「幸福」は、そのような恣意的な意味作用の中で生じている事態である。

そのため、岸見(2017)が「これが幸福なのかと定義を理解するだけで幸福になれるのであれば、誰もが幸福になれるだろう」(p.20)と述べるように、幸福それ自体を一般化して定義することは難しい。また、故事成語の「塞翁が馬」の物語が示すように、予測できず、また事後的において価値も変容していく流動性を幸福は有している。それは、意味作用が事後的な作用であり、幸福が個々の意味作用によって時限的に定立させられているからに他ならない。

だが、そのような流動性を有しながら、幸福を目的として行為を選択するという共通項を人間は持っている。パスカルは、「人間は幸福であろうと願い、幸福であることしか願わず、またそう願わずにはいられない」(1973, p.127)と指摘する。人間にとっての〈生きること〉の意味作用が、恣意的に主体の側から生じているとき、幸福が目的化され、「〈私〉は…」という存在認識が合目的的に定立されている事態が在る。そこで、〈私〉そのものの存在理由と「幸福」の概念を一度、括弧に閉じて「〈幸福〉と名付けられて目的化される事態が在る」という事実から出発する。

「〈私〉の意味」は、主体自身からは保証されなかつ

た。そこから、他者との鏡像的な関係性による自己の創出を議論の出発点として、次の「役割同一性」において生じる自己性を手掛かりに考察する。つまり、誰かのために生きるとすれば、〈私〉自身に意味がなくても、そのことは「生きる意味 (raison d'être)」となり得るということである。

人間は、他者を鏡像として自己を創出しているが、その他者は絶えず入れ替わりながら、自己を連続させている。このとき「～のための〈私〉」という役割同一性の形で、主体は〈私〉の存在を認識している。例えば、教師であれば、「生徒のための〈私〉」「学校のための〈私〉」などであろうし、家庭に変えれば、「息子と娘のための〈私〉」になる。このような役割同一性の形で、或る場における主体性の反復から生成された「間主観的な〈私〉」をユングはペルソナ (persona) と名付けた¹。そのペルソナとも言うべき、他者から与えられた仮面を〈私〉として引き受ける自己認識の仕方は、同時に「生きる理由」にもなっている。木村 (1982) は、鬱病を引き起こしやすい状況として「自己の役割同一性の保持が困難になるような状況」(p.118) を挙げる。すなわち、役割同一性として存在を認識している関係性は、人間が意味作用によって自己を認識するシステムから生命の欲求として必然的に生じているのである。

次に、この「～のために」という関係性は、存在認識における鏡像的他者が対象であることから、夫婦、親子を越えて、友人、職場の仲間、時には一見的な関係など、その状況において互いに求め、求められる関係性が想定される。そのような広い役割同一性を存在理由とする行為や意識は、アリストテレスが定義した愛 (フィリア)、人間という卓越性に基づいた善を志向する中での行為や状態に相当するだろう。アリストテレスは、愛 (フィリア) は「相互応酬的な行為」であると述べ、互いに求めあい、求められていることを自覚する関係性であるとしている (1973, p.89)²。その関係性が、存在理由への問いを立ててしまう人間の認識システムから生じているとすれば、愛は「人間の卓越性」における行為であり、「他者にとっての〈私〉」という関係性を欲する中での〈幸福〉への合目的な行為だと言える。

そして、この関係性は、人と人だけには留まらない。作品もまた愛の対象となる。アリストテレス自身は、愛情は無生物に対しても持つことができるが、相互的な愛情が無いとして、愛 (フィリア) は無生物に対しては持てないとしている。しかし「生きる意味」を与えてくれる対象として考えるならば、つくり出す「もの」やつくり出された「もの」としての無機物的な「もの」も含めて愛は考えられる必要が在るだろう。なぜなら、ベルクソンが「状態そのものがすでに変化なのである」(2010, p.19) というように、現象としては静止しているように見える「もの」であっても絶えず差異が生じているのが純粹持続としての時間である。その理の中では、差異の中で反復している「こと」が、同じ「もの」としての認識を成立させる。そのとき、意識上に現前した「もの」は、主体の意識対象となることで、その「もの」についての時間が成立するのであって、主体の選択によって「もの」の〈今〉の在り方が決定させられているのである。ゆえに、「～のために」として主体に志向される対象となった「もの」は、〈私〉に対して未来の選択を迫ってくる意味で「相互応酬的」である。だから「他者にとっての〈私〉」という関係性は、有機物、無機物を問わない。

「音楽の幸福」が、このフィリア的な関係性によって生じているとき、主体自身とは異なる時間軸が生じることになる。なぜなら、「生きがい」として意味作用の対象となった他者との時間は、与えられるのではなく、主体の側から生じる「もの」だからである。木村 (1982) は、主体と認識世界の関係として時間を次のように捉える (p.79)。

時間は単純にわれわれに対して外部から与えられているようなものではない。それは、私自身がそこに立ち会っているいまが以前と以後の両方に拡がっているということであり、私自身がいまここにあるという現実から切り離すことのできない、こと的なありかたをもった現象である。

主体が〈今、ここ〉において現前する「もの」を認識するとき、その「もの」の〈始まり〉と〈終わり〉は同時に主体の意味作用に連鎖している。その分節

¹ ユングは次のように述べる。「ペルソナとは、『ひとりのひとが、何ものとして現れるか』ということに関して、個人と社会との間に結ばれた一種の妥協である。そのひとは名前を得、肩書を手に入れ、職務を演じ、これこれの人物となる」(1995, p.67)

² アリストテレスは幸福 (フィリア) の条件を次のように述べる。「お互いに好意を抱いており、お互いに相手かたにとってのもろもろの善を願っているということ、そして、それのみならず、このことが相手かたに知られていること」(アリストテレス 1973, p.90)

が、主体自身（すなわち〈私〉という「もの」）に向いたとき、〈私〉の〈始まり〉と〈終わり〉の分節が生じる。そのことは、同時に外側の無が露わになることを意味している。すなわち他者の役割同一性による存在理由の獲得とは、他者の時間軸の出現と、自己の時間軸の二重性に成立しているということである。

そこで、この異なる時間軸との関係性という視点から事象を捉えることで、「私が生きる意味」として存在を保証される中での〈幸福〉の性質を、音楽行為との関係性ととともに考察していく。

2. 試行錯誤における否定と肯定の働き

人間の「存在への問い」に対して、知覚と行為の円環関係によって創造行為が生じることを「試行錯誤の理論化 (1) (2)」では論じてきた。その中で試行錯誤による創造行為は、次のように定義されている（清水 2019, p.72）。

状態から生じる〈実感〉した「こと」が、意味作用によって「これではない」「これだ」と内的な〈私〉が話しかけてくるとき、そこから、つくられた「もの」が、〈何か〉への答えとなって現前する。

そこで、まずは「肯定」と「否定」という対立的な概念が、共に人間の存在における必要条件であることを踏まえる必要から、創造行為における両者の働きと関係を以下に定立してから〈幸福〉の議論を進めることにする。

サルトルは、人間が存在の問いにおいて対象を無化し、「在る・無い」を考えることのできる存在として他と区別されるとする（2007, p.98）。そして、「在る・無い」は、「論理的系列の極限項」でありながら「同時性をもつことができる」とする（2007, p.98）。サルトルは、その上で、両者の関係性について、次のように言及する（2007, p.92）。

「否」という言うことが可能であるための必要な条件は、非存在が、われわれのうちにおける、またわれわれの外における、不断の現前であるということである。すなわちその条件は、無が存在につきまとう *le néant hante l'être*. ということである。（傍点筆者）

サルトルの指摘は、「無い」は「在る」によって成

立するということである。認識において「無い」と言うとき、〈何か〉に対しての「無い」であり、「在る」の否定は〈出会い〉によって成立するのである。〈出会い〉は時間軸上において止まることはない。それは不断の現前である。そのとき主体は、同じ意識対象に対して、在るも無いも選択することが出来る。このとき、時間軸における「否定」は「反復への否定」であるから、主体は「もの」の反復性を止める必要がある。そして、その「否定」は、〈何か〉の存在に対する無化行為だということである。

ゆえに音楽行為においては、時間軸上の差異に消えゆくから異なる音を探すことになるし、楽譜に記入した後であれば、消しゴムで消すことになる。この無化行為は、〈何か〉が在るから否定するのである。すなわち、作ることだけが創造行為ではなく、破壊も創造行為であって、ともに試行錯誤のシステムを成立させる必要条件なのである。そして、否定した〈私〉という事実は過去として堆積し、未来の予期として参照されることになるのだから、否定することは決して作る前に戻ることではない。言い換えれば、主体は「壊すこと、否定すること」に〈出会う〉ためにつくったのだとも言える。その意味で「もの」の破壊は創造行為であり、既に〈何か〉が生まれた結果なのである。

よって、音に出会うことによって生じる「これではない」という否定は、「これだ」という〈何か〉が「あるだろう」という未来に向かって現在の目的となる。意識対象の音を否定することで、私の内部空間に生じる〈何か〉を反復させようとする。それは〈私〉の持続への契機を意味する。一方、肯定への出会いは、その快楽から音を反復させることを欲望する。主体は、その音を選択し、否定と出会ったときに未来を志向する事実性が付与されて過去の〈私〉として堆積される。また次のようにも言える、肯定への出会いによる快楽を得るためには、「これではない」に出会わないといけない。「これだ」という期待は、「これではない」に出会うかもしれないという否定を付随させながら、「もの」の否定に出会うことで、期待への志向と幻想を強め、出会いの可能性と、そのときの快を大きくさせるのである。

すなわち、創造行為における否定と肯定は、二項対立的に性質として捉えられるが、ともに〈何か〉が在ることの発露の違いであって、それは、現前することを待っているのである。そして、肯定と否定として運動的に出現するから、絶えざる現前を欲する〈私〉の持続の契機となっているのである。ベルクソ

ンの言葉を借りれば、「連続的にみずからを創造している」（2010, p.25）とする生物一般の「エラン・ヴィタル élan vital（生の弾み）」³の運動エネルギーを生成するシステムである。あるいは、フロイトが、人間の様々な精神状態と行為の現れを、エロス（生の欲動）と死の欲動という2つの衝動による構造から論じたことも、否定と肯定によって成り立つ試行錯誤のシステムを、精神分析の立場において理論化したものだとも言える⁴。いずれ、人は、否定と肯定を対立させるのではなく、共に生の持続におけるシステムとして相互嵌入的にお互いを必要条件とする関係として所持している、ということである⁵。

ただ、このシステムの目的が〈幸福〉であるとして、思考における否定と肯定によって試行錯誤をすることで〈幸福〉に至るかと言えば、それほど事態は単純ではない。人間は様々な文脈の中に在り、言語を始めとする多くの歴史的、文化的な体系の中で存在している。それらの体系、とくに言語によって〈私〉という自我が生成されるが、それ自体が意識対象であるが故に、主体との分裂状態を引き起こしている。その分裂において生じる〈私〉が、欲望として主体の意味作用に影響を与えている以上、先ずは、意味作用を経た思考以前の、前言語的な〈実感〉において、快—不快という「肯定か、否定か」という問いが生じる必要が在る。この〈実感〉における身体的肯定は対象へのエロスであり、その否定は死の欲動とも言える「対象の消去」である。そのような快を伴う対象への意識の志向性は、「美」と名付けることが可能であろう。よって人間は「～のために」という他者との関係性の中で、肯定であっても、否定であっても、「美」を求め

る〈何か〉が在るという内的事実を抱えながら、創造行為による〈出会い〉の先に〈幸福〉が在るとして試行錯誤をするのである。この否定と肯定の関係性、フィリア的な関係とエロスの志向性を踏まえて、次に音楽行為における〈幸福〉について考察していく。

3. 音楽行為における時間の二重性による〈幸福〉

主体は「もの」として（意識作用による反復によって）括られた時間が意識対象に上がると、そこに因果関係が内在しているのを捉える。そこから、主体は、他者（音楽行為であれば「音楽」という時間の持続）の時間において未来への意味作用を生じる。それは、「～のために、今がある」というような現在という存在に対する意味を保証する。

例えば、仲間とともに演奏の練習をしているとき、あるいは、演奏をしているとき、誰かの演奏を聴いているとき、そこに主体の〈始まり〉から〈今〉、そして〈終わり〉へと向かっていく時間軸（図1のA）とは別の時間軸（図1のB）が在る。その「もの」として括られた時間の中にある因果関係（ $X \rightarrow Y$ ）に〈私〉の時間（時間軸A）が巻き込まれるとき、意識は、〈私〉の時間から離れることになる。絶えず生じる〈今、今、今…〉は、その都度、「もの」化された時間内に生じる因果（ $X \rightarrow Y$ ）によって、合目的性を帯びた未来から到来する形で生成されることになる。すなわち、「音」に〈出会い〉ながら「音楽」が形成されていく過程において、〈何か〉を生じ、その〈何か〉と出会ったときに得られる「これだ」という快に向かつて、未来が主語的に、自己によって目的化され

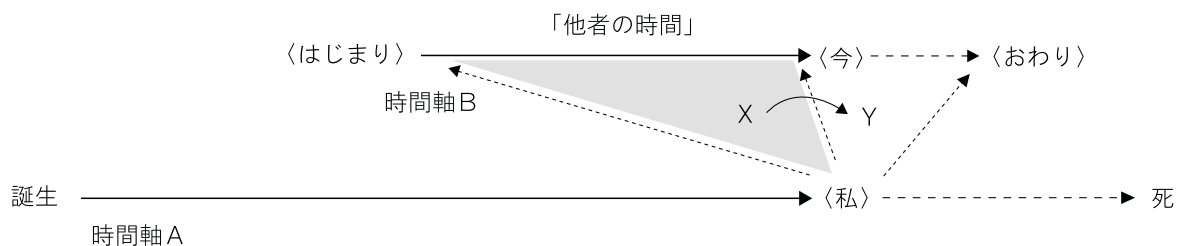


図1「主体の時間」と「意識対象の時間」の関係

³ ユングは次のように述べる。「ペルソナとは、『ひとりのひとが、何ものとして現れるか』ということに関して、個人と社会との間に結ばれた一種の妥協である。そのひとは名前を得、肩書を手に入れ、職務を演じ、これこれの人物となる」（1995, p.67）

⁴ アリストテレスは幸福（フィリア）の条件を次のように述べる。「お互いに好意を抱いており、お互いに相手かたにとつ

てのよろもろの善を願っているということ、そして、それのみならず、このことが相手かたに知られていること」（アリストテレス 1973, p.90）

⁵ ベルクソン（2010）は、不可逆性の時間の中で環境に対応しながら進化していくエネルギーが生物一般には在るとする。その「本源的な弾み」をエラン・ヴィタルと名付けている（pp.119-131）。

るのである。言葉にすると「次の音をつくるために、今が在る」とか、「演奏をつくる仲間のために、今が在る」といった浅薄な標語のようになってしまうが、〈私〉の〈今〉に対する意味が〈そこ〉にもたらされるのである。この〈そこ〉は「もの」として（意識作用による反復によって）括られた時間である。

このとき、対象となる「もの」は、欲望の対象であって、「生きる目的」＝「生きがい」であるとすれば、それは〈幸福〉とも置き換えられる。だが、その対象となる「もの」は、他者との関係性から生じるために、そこでの快楽としての意味作用は〈私〉にとっての「よい」でありながら〈私たち〉にとっての「良い」ではなければならない。集合的主体の拡大された〈ヒト〉としての、さらに拡大して〈生物としての〉、さらには…と拡大する中での「よい」へと近づかなければならない。そのような集合的主体における「よい」は「善い」と名付けられなければならない。そして、それは感性の段階での「審級」が含まれる。すなわち「美」を求めると同時に、どうしても拭いきれない社会的な体系における「他者の欲望」から掻き分けるように探られる「美」である。それゆえに、人々は、「もの」をつくり出しながら、「感性」を働かせて、他者と関わりながら「〈私〉が生きる意味」を模索しているのだ。このような、他の主体と関わりながら「美」を「より善いもの」として模索する行為は、個人的な快を超えて志向されているのであって、フィリア的な行為だと言える。

このように、他の主体や音と「～のために」として関係するとき、ある時間の定点から、ある時間の定点までの間をひとつの「もの」として分節して認識する。それによって、〈そこ〉に主体と異なる時間軸が生じる。そのときに生じる因果関係と、未来の未決状態に対する主語的自己の合目的性が、主体に持続することを要求してくる。その主体に対する反復性の要求は、〈私〉というシステムに入り込んで来るために、先に定立したように主体の内部で対象（鏡像的な〈私〉）に対する否定と肯定の審級を生み出す。

このとき、否定が在るからこそ肯定が生じ、肯定が在るからこそ否定が生じるのであって、快－不快の身体の状態が、その主語的自己である「〈私〉は…」を生み出すのである。この時間軸上の絶えざる運動システムは、生命のシステムであり、知覚と運動の円環における根幹となるシステムである。このように他者

の時間軸に巻き込まれるように「今、在る」自己の意味を連続的に見出すことで、〈私〉そのものの時間に対する「意味の不在」という絶望から逃れているのが「役割同一性」としての「生きる意味」と考えられる。

このような「もの」の時間による存在に対する意味の保証は、音楽には限らない。仕事を失ったことが鬱を発症する要因になることが事実として在る。それは、何らかの〈場〉における〈始まり〉があつて〈終わり〉が在る、括られた「もの」としての時間を失ったときの、〈私〉そのものの時間を見てしまう事態である。すなわち、〈私〉という「もの」を時間として見た時に、〈始まり〉と〈終わり〉を分節するということは、その分節した先を見ることに他ならない。〈私〉以前、以後の時間は、不在の事実として存在の否定に触れることになるのである。ロカンタンに襲いかかる〈吐き気〉は、このような主体が〈私〉自身の時間に触れたときの「こと」であつたに違いない。そして、古いラグ・タイムを聴いている間に彼が感じた「ささやかな幸福」の理由として彼自身が述べる「われわれの時間とは別の時間がある」とは、ここまで述べてきた意識対象となる「もの」化された他者の時間との関係であつたと思われる。ロカンタンはこの時間の二重性について次のように述べていた（サルトル 1951, p.37）。

私の外部に、あの鋼鉄の帯のようなもの、音楽の緊密な持続がある。それは、われわれの時間を貫いて横切り、われわれの時間を拒否し、酷薄な尖端でそれをひき裂く。われわれの時間とは別の時間がある。

主体は〈われわれの時間〉から離れて（あるいは拒否して）異なる時間に存在するときに「ささやかな幸福」を見出す、とサルトルはロカンタンを通して主張する。パスカルが『パンセ』の中で、幸福は不幸な状態を考えることから気を紛らすことで成り立っていると主張するのは、このような事態や関係性を述べているのだと言える（1973, p.103-111）。言い換えれば、主体は、自己そのものの時間から離れることで、自己言及の不安と意味の消失から逃れているのであるが、それが、あまりに日常的に行われているために隠されているというのが現実であろう。ラカンが精神分析において、不安の出現を「現実界への接近」⁶として

⁶ 不安と現実界の関係は、松本（2015）「対象 a の顕現に対す

る防衛のモードによる鑑別診断」（pp.281-287）を参照。

論じたのは、このような事態を言い得ているとも言える。それは〈現実〉というものが、現前する物質でも対象でもなく、人間の日々の営みが、このような危うさを常に内包しているその在り方そのものであることを意味している。〈現実〉は、常に主体と共に在りながら、時には、ロカンタンの〈吐き気〉のように意味の濁流となって、主体に「生きている」ということの意味を問いかけているのである。

4. 音楽行為における時間軸の消失と〈幸福〉

主体が遡及的な意識作用によって因果で事物を捉える以上、先のフィリア的な関係性によって自己の存在理由を得ることは、論理的に帰結され得る。その時間の二重性こそ、ロカンタンが「幸福」について述べた「われわれの時間とは別の時間」であったのだろうと推察される。

だが、このとき〈私〉の「存在理由」は保証されても、〈幸福〉は、それだけでは成立しない。なぜなら、審級としての肯定、あるいは合目的に〈幸福〉とされる事態が予期されるからこそ、肯定と否定が生じるからである。それは、〈今、今、今…〉の連続における瞬間として生じる「こと」であり、「言葉」になる前の前言語的な「物自体」⁷との出会いに知覚された「もの」から生じる「こと」である。その瞬間における審級を成立させるには〈幸福〉という事態がメタノエシス的に働いていなければ説明がつかない。

そこで、「ひとつの音」や「ひとつの物」との出会いにおいて、その質感に囚われるような「美と向き合う瞬間」によって成立する時間の存在が考えられる。出会いの瞬間、否でなく是としたとき、私にとっての美であるとすれば、美は肯定的感情を起すだろう。そうすれば、その後の意味作用は「反復への欲望」である。

厳密に言えば、「ひとつの音」も時間軸上の持続である。そこにも〈始まり〉から〈終わり〉までの持続が在る。主体の認識は、意識作用によって遡及的に行われる。空間的な差異が時間軸上で反復されているから同じ質感を持続として認識する。そのときに空間的に過去を想起して、〈始まり〉を遡及的に捉えながら、〈終わり〉の時点で空間をひとつの「もの」として留

めることによって「もの」化された時間は、「ひとつの音の質感」として閉じられる。発音から減衰まで一つの音の持続においても「変化」は在る。それらも一つの音として主体による認識作用によって「もの」化される。それは、あたかも1枚の絵画が、時間軸上に反復するような「もの」である。どんなに瞬間の音でも、この反復作用は働いていると考えられる。そうでなければ絶えず過ぎ去る時間の差異の中で音の持続を認識はできない。例えば、2時間の出来事を想起するとき、2時間かけて想起することはしない。1時間かかった「昨日の食事」を思い出すとき、主体が区切った〈始まり〉と〈終わり〉の間の1時間は、「昨日の食事」として「もの」化された時間によって持続の間に生じた「こと」を内包して総合的な「こと」として一瞬のうちに想起されるのである。その持続の間に生じた「こと」が1枚の絵画の質感のように「こと」が輻輳して織り込まれた質感となって統合されるのだと考えられる。1枚の絵から受けた質感が創作の契機となるのも、この関係性の逆転と考えると合点が行く。人間主体は、時間と空間の相互嵌入の関係性の中で知覚と運動の円環関係を成立しているのが、どの行為においても基盤になっているのである。その「ひとつの音」として空間化された「もの」は、想起する度に異なる「もの」でもある。ただ、過ぎ去った「事実」として〈ある音〉として名付けられた「もの」であり、主体によって反復性を付与された「もの」である。

その「ひとつの音」としても成立する、遡及的に時間を閉じて「もの」化した瞬間に、因果を超えた時間が在ると言える。すなわち「質感」という一つの音が有する「こと」に意識が囚われたとき、過去と未来の因果ではなく〈私〉が「これだ」というエロシ的な志向性で自己の時間から離れるのである。それは、過去も未来も無い、ただ「反復への肯定」、すなわち意味も何も無いところでの、純粋に「生きたい」という無条件な肯定としての〈実感〉である。それは因果という前後の関係が無くなることから時間の消失とも言える。このような事態が、これまで「美」と名付けてきた事態ではないだろうか。ロカンタンは、音楽を聴いたときの「幸福」における「〈われわれ〉の時間」について次のように述べていた（サルトル 1951, p.37）。

⁷ 知覚した結果として内部空間に現れる「もの」ではなく、その知覚を触発する外部に在る「物自体」のこと。現象としての認識された主観的な「もの」に対してカントは、それを触

発する仮想的存在としての「物自体」を措定した（カント 1961, pp.333-334）。

この幸福は粘々した水溜りの底に、〈われわれの〉時間——薄紫いろのズボン吊りと凹んだ腰掛けの時間——の底に展開する。それは、幅のある柔らかい瞬間からできていて、油の染みのように周辺から拡大して行く。幸福は生れたばかりで、すでに年老いている。二十年も前から私はそれを識っていたように思われる。

このロカンタン（サルトル）の言葉には、ここで述べる因果を超えた時間に対する概念が、繊細な表現で綴られている。瞬間でありながら全体であり、全体であったことが瞬間であるような、〈始まり〉と〈終わり〉の因果として習得的に捉える前の、およそ生まれたときから生物として捉えてきたであろう根源的な時間である。その都度、〈私〉にとっての）意味として生じるような時間から解き放たれる、対象そのものの志向から生じる「美」としての幸福である。

そして、先の因果関係を有する構造化された音楽も、演奏として完結した後は、〈始まり〉から〈終わり〉までの空間化された「もの」として一つの「質感」として捉えられるようになる。それは閉じた瞬間でありながら、〈それまで〉がなければ生じない瞬間でありつつも、やはり瞬間として想起されるような「質感」である。音楽行為の途中は、過去と未来の因果の中に在るが、〈終わり〉として閉じた後は、一つの「もの」として主体の過去に堆積され、様々な「こと」の連続を内包して統合された「こと」として想起されることになる。そのことは、〈始まり〉において生じた「こと」も最後の「こと」が生じたときにその意味が決定することも示している。例えば、演奏を終えた後の言葉にならない感じや、美しい演奏を聴き終えた後の高揚した心身の状態を（安易ではあるが）「感動した」などといった言葉で綴るのは、主体が恣意的に選択したシニフィアンと共に、事後的に「ひとつの質感」として想起している事態であろう。そして、その構造の部分で成立させているのは、やはり一つの音、あるいは同時に生じている音の重なりとしての質感であって、その時々「美」が、音と音同士の構成に意識を志向させる作用として働く。すなわち〈私〉の時間から離れた因果としての「音楽」の時間と、因果を超えた「美」としての「音」の時間との共同作用が、音楽行為を支えているのである。

なぜ、このような「美」を感じるシステムが人間に在るのか。それは、意味の前のシステムであり、サルトルが述べるように、われわれの時間の底、すなわち

因果の時間の底流に在り、それを支える関係である。生物が創造的に進化の中で、そのシステムが構築されたとするならば、時間と空間の理の中で生じた生命の持続における働きである。そうすると人間が「美」という何かを求めている「こと」は、ベルクソンの言う創造的進化の中で存在のシステムとして与えられたとも言える。ならば、人間の存在理由として、「美」を求めるという意味が存在に先立って与えられている、という仮説は成り立たないだろうか。

5. 音楽行為の後に生じる「意味作用」の働き

人間の存在における「肯定」と「否定」のシステムを成立させている根源的な契機として「美」への志向が在り、その「美」が存在を持続させる目的だとすれば、「美」が〈幸福〉なのだろうか。確かに極楽や天国など、〈幸福な場〉の代名詞は、美しい世界として描かれてきた。アランの『幸福論』には、人間の〈幸福〉に対する感覚が述べられている。

幸福は見た目にも美しいものである。これこそ最も美しい光景である。（アラン1998, p.311）

しかし、「美」もまた社会的、文化的文脈を背負うが故に多義性、固有性を有する。そのため、「美」を規定することもまた難しい。それに関わらず、人々は「美」について語り、時として「美」を固定化して論争を起こすことも在る。この事態は、どういうことであろうか。

ニーチェは『悲劇の誕生』において芸術の発展をアポロ的なものとデュオニュソス的なものと対立として捉えて論じている。ニーチェは、理性と秩序によって支配されるものをアポロ的芸術世界とし、感情の表現を主としたものをデュオニュソス的芸術の世界とした（1979, pp.24-25）。このような理性と秩序による表現と、感情を主とする表現との二項対立的な音楽の価値付けと論争は古代から存在した。例えば、プラトンは、音楽が精神を浄化させるものとして、理性的にあるべきだと説き、アテナイの状況に対して批判したし、一方、アリストテレスは、音楽を娯楽として位置付けた上で、教育の重要性を説いている。このような対立的に音楽を捉え、正当性を主張する行為はどの時代においても存在している。

だが、このような事実に対して、どちらが正しいかということをはっきりとしたい訳ではない。意味作用が

人間の側からである以上、時間的・空間的な文脈が関係していて単純に二分化できないことも理由に在るが、ここで論じたいのはそのことではない。ここで問題にしたいのは、対立的に価値付けてきたという事実が存在するということである。音楽が事後に「もの」として扱われ、言語によって「肯定」と「否定」による選択が行われてきたという事実である。

なぜ、「より善い」を目指してつくられた「もの」が事後に判断されるのだろうか。主体は、「もの」に出会ったときに欲望という〈何か〉を生じながら生きていることを先の「試行錯誤の理論化（2）」では論じた。欲望を満たそうとして生じる「幻想」から、主語的な自己は生じるが、それは、（社会的な）他者の欲望、ラカンの言葉を借りれば「大文字の他者」にメタノエシス的に影響される。だから、事後の論争や批判といった言語活動は、個としての〈良い〉ではなく多としての〈善い〉を目指そうとする人間の生得的なシステムの結果であると考えられる。つまり、〈私〉や〈私たち〉といった水準でつくられた「もの」が〈ヒト〉として反復するに値するか否か、事後的に〈ヒト〉は判断しようとするのである。「作品」という反復される「もの」に対する言語活動は、現前した音や音楽に対する「より善い」を目指した試行錯誤の姿である。

だが「大文字の他者」が志向する先は、本当に幸福なのだろうか。音楽に、あるいは、その先の幸福に普遍性は在るのだろうか。〈幸福〉という言葉もまた〈人の手垢〉にまみれている。さらに〈幸福〉の言葉がもつコノテーション、あるいはシニフィアンの連鎖から生じる「こと」は、前言語的な感性が志向する美しさを阻害する危険性をもっている。その「言葉」という〈私〉自身を保証する「もの」は、離れようとしても離れない対自的な「もの」である。

人は常に「意味」との対話の中に在る。ロカンタンは、公園のベンチに腰掛けているとき、世界が人間の符号化した意味によって存在し、吐き気の原因が〈私〉自身であることを知る（1951, p.208）。サルトルはロカンタンの思考を通して、実存は、「私たちの内部」に在り、「それは〈私たち〉である」と言う（1951, p.208）。それは、〈私〉にとっての「意味」であり、〈私〉が〈私〉として「存在」するための恣意的なものなのである。

そして、言葉の意味作用は事後的でありながら、主体の感性や直観といった意識の志向性に回帰的に作用している。つまり、「もの」との出会いにおいて前言語的な「こと」を生じる主体の意識作用の志向は、やはり〈私〉なのであって、その〈私〉を成立させている事実性として言葉は先立って作用するのである。そうすると、より善い美を捉えるためには、単に言葉を離れて感性だけにすれば良いという問題ではないことが導かれる。中村雄二郎は「芸術」に対して次のように述べる。

行為的直観⁸に即してわれがどこまでも物になるとき、その方向に芸術が成立する（1992, p.140）

そのような「言葉」を離れて、感性で美を捉えるような直観によって「もの」をつくることが、第一に必要であろう。だが、それだけではいけない。同時に、言葉自体も、そのような芸術的な〈眼差し〉によって常に見直される必要が在る。

音や音楽を通して〈何か〉を求めているときに生じる様々な「こと」は、「幸福とは何か」という問いに対する実感を伴う道標となる。しかし、つくり出す、感じる、その往還、あるいは同時性の中で、考える〈私〉が登場せざるを得ない。その〈私〉による事後の意味作用を間違えると、本質的な「美」や「善さ」が消え去るか、あるいは、異なるものに変換されて、知覚と運動の連続性に在る未来が、誤った方向に行くことになるだろう。その〈私〉が「より善い」志向性で意識が作用するためには、フィリア的な関係の中で、互いに問い、批判することが求められる。そのとき、それは芸術的な〈眼差し〉によって行われなければならない。認識の仕組みは、「こと」も「もの」との相互嵌入的な関係性において成立している以上、「もの」の影響、すなわち〈私〉の意味作用を抜きには成立しない。ここに音楽における〈幸福〉という言葉の意味を問う必要性、あるいは音楽という「もの」を「こと」から問う必要性が存在するのである。すなわち「幸福」は、知覚と運動の連続という不断の「創造」の持続から生じ、求め続けること、問い続けることに普遍性が在る。そこには、芸術的な〈眼差し〉によって言葉を問い続ける「哲学」が必要なのである。

⁸ 行為的直観は、西田幾多郎の言葉であるが、中村は、「行為的直観は《物を身体的に把握する》ことだとも言える」（1992,

p.140）と説明する。

6. 音楽行為における「幸福」についての措定的定義

〈私〉自身の生きる意味は、世界から与えられていないと措定した上で、誰かのために生きなければならないとすればそれは生きる意味になる、という一つの事実をもとに現象学的な視点から考察してきた。その結果、異なる時間軸における意味作用が、主体自身の時間軸における「意味の不在」からの回避であることが導かれた。そのとき、不特定多数の〈ヒト〉という集合的他者として志向される〈幸福〉というフィリア的な愛と、時間軸という因果も超える「そのもの」の「幸福」を志向するエロスとしての「美」が、その場における〈幸福〉を定立させていく。その事態に向けて合目的に、主体の内部で肯定と否定が生じることで、主体の知覚と運動の円環運動を生じる人間のシステムが見出された。その「幸福」は「まだ一ない」未来の事態として欲望されるため、現前して初めて〈実感〉による「肯定」と「否定」生じることになる。だからこそ、感性の学びと悟性の学びを〈ヒト〉は必要とする。そのことを学ぶには、純粹持続における主体の問いが成立する音楽行為が有効なのである。

主体に生じる未来の「選択」は、本来はサルトルが述べるように（未来は未決であるという意味において）自由である。だが、それは本当の意味での自由でなければならない。すなわち倫理や美を志向する精神の自由である。グローバルになり、集合的な主体は一気に〈私たち〉を超えて巨大な〈私〉の集合体としての〈何か〉になった。例えば、他者の承認は「いいね」によって為される。だが、その「いいね」を欲してくる他者の声に対して〈何か〉の声が「善か、否か」を問い続けることをやめたときに、他者の欲望という、それ自体がひとつの意志をもったかのような運動性に巻き込まれて、美しかった時間が絶えず過ぎ去る時間の流れに消え去るだろう。

芸術は、そのことに気付かせる「こと」の契機として存在しなければいけない。言葉での理解でなく〈実感〉としての〈出会い〉である。音楽は〈今、生きていること〉の美しさを感じさせるとともに、人間が互いに「美」を問いながら未来を創造していく存在であることを感じさせる。古代ギリシア人が、音楽と哲学を分節することなく美を探索していたことは、人間の根源的な欲求の現れであったと言える。

カントは人間が理性を実践していくにあたり、心に二つの物、「私の上なる星をちりばめた空」と「私のうちなる道徳的法則」が在るとした（1979, p.317）。

それは、〈宇宙〉と名付けられてきた外的な空間と時間の次元における法則と、そこに存在する「美」、そして、その世界の中で生じる〈私〉の内的な「善」を求める「美」のことであった。そのとき人間が希求する「美」には、単に音や形、色彩といった中での創造物だけではなく、人の行いや、世界で生じる出来事など、あらゆる認識対象の「もの」と「こと」が含まれるのである。だからこそ音楽行為には、「感性」という前言語的なところの「直観」と、それに基づいた試行錯誤が必要であり、そこに意味作用し、意識作用を背後から規定する言語活動もまた、「より善い」を求めて試行錯誤されなければならないのである。

【引用文献】

- アラン（1998）『幸福論』岩波書店。
 アリストテレス（1971）『ニコマコス倫理学（上）』高田三郎訳、岩波書店。
 アリストテレス（1973）『ニコマコス倫理学（下）』高田三郎訳、岩波書店。
 カント（1979）『実践理性批判』波多野清一・宮本和吉・篠田英雄訳、岩波書店。
 カント（1961）『純粹理性批判（上）』篠田英雄訳、岩波書店。
 岸見一郎（2017）『幸福の科学』講談社。
 木村敏（1982）『時間と自己』中央公論新社。
 サルトル、ジャン＝ポール（1951）『嘔吐』白井浩司訳、人文書院。
 サルトル、ジャン＝ポール（2007）『存在と無—現象学的存在論の試みⅠ』松浪信三郎訳、筑摩書房。
 清水稔（2019）「音楽の創造行為における試行錯誤の理論化の試み（2）—現象学視点による創造行為の外的な契機と内的な契機の定義—」『弘前大学教育学部研究紀要』第121号、弘前大学教育学部。
 パスカル（1973）『パンセ』前田陽一・由木康訳、中央公論新社。
 フロイト、ジークムント（1977）『精神分析学入門（下）』高橋義孝・下坂幸三訳、新潮社。
 フロイト、ジークムント（1966）『快楽原則の彼岸』『自我論集』中山元訳、筑摩書房。
 ベルクソン、アンリ（2010）『創造的進化』合田正人・松井久訳、筑摩書房。
 中村雄二郎（1992）『臨床の知とは何か』岩波書店。
 ニーチェ、フリードリヒ（1979）『悲劇の誕生』塩屋竹男訳、理想社。
 松本卓也（2015）『人はみな妄想する—ジャック・ラカンと鑑別診断の思想』青土社。
 ユング、カール・グスタフ（1995）『自我と無意識』松代洋一・渡辺学訳、第三文明社。

（2019. 8. 9 受理）